

「もし私が世界の問題を一つだけ解決できる立場にあったら、何を達成し、どのような世界にしたいか。 - 子どもの飢餓ゼロのために私ができること- 」

宮崎県代表 宮崎県立宮崎南高等学校 2年 酒井 彩花

泣いたり、笑ったり。子供はころころと表情を変えます。それが仕事だと思えるほどです。しかし、私は笑うことを忘れ、感情を失ったような子供たちを知っています。

「千の丘の国」と呼ばれ、美しく雄大な自然の景色が広がるルワンダ。しかし、標高約二千メートル地点の小さな丘で、追いやられたように生活をしている集落があります。最貧困地域、通称「ミヨベ町」。そこには、ぼろぼろの服を着た、空腹でおなかがポッコリと飛び出ている多くの子供たちがいます。ミヨベの子供たちは、一日を生き抜くのに必死で、夢や希望を思い描くことなど出来ません。

ミヨベの現状を知ったのは、所属しているユネスコ部で参加した講演会でした。現地で支援活動に従事した方の話では、ミヨベの人びとは泥水のように濁ったご飯を食べていたといいます。私は、この食事の写真を見て衝撃を受けました。それは、とても人の食べ物とは思えなかったからです。国際的な支援を受けているとはいえ、各家庭一日一食がやっとであるため、栄養失調を改善するには、まだまだ食料の提供が必要なのだそうです。

私はこの講演を聞くまで、世界には貧困で苦しんでいる人がいるということ、漠然と捉えていただけでした。日本で平穏に暮らしている私には、今なお世界のどこかで紛争が起きていることや、貧困や飢餓で毎日多くの人が亡くなっているという現実を、どこか別の世界のここのように考えていました。正直に言えば、私の生活ではありえないとさえ思っていました。しかし、これらの問題は、決して遠い世界のものではないのです。

皆さんは、今、どのくらいの人たちが飢餓で苦しんでいるかご存じでしょうか。二〇一九年の時点で、六億九千万人とされる飢餓人口は、コロナウイルスの影響で更に増加傾向が続いています。国連は二〇三〇年までに飢餓ゼロの目標を達成するのは難しいと判断しています。しかし、飢餓問題の解決は、最優先事項だと私は考えています。飢餓ゼロを達成できれば、栄養不足による死亡者も大幅に減少します。とくに、これからの世界を担っていく子供たちの未来は、なんとしても守らなければなりません。彼らには、高校生の私たちと同じように、学校で学び、友人と自分の将来について語り合う権利があります。それなのに、先進国、発展途上国、紛争地域、といった、生まれた環境でその権利が奪われるのは、あまりにも理不尽です。飽食でフードロスが問題化している日本でさえ、近年、毎日の食事に困る子供の絶対的貧困が顕在化しています。立場の弱い子供の状況は、その社会の縮図です。子供たちが夢をもち、生きる意欲も持つことが出来る社会は、すべての年代の人たちにとっても、希望を持てる社会となるはずです。

私には、看護師になるという夢があります。幼いころに入院をし、看護師の方にたくさんお世話になったからです。その時、私のように病気に苦しむ子供たちを看護師としてサポートし、大人にまで成長する手助けをしたいと考えるようになりました。そうした私に、今、明確な目標ができました。それは、赤十字の国際救援活動に参加することです。もちろん看護師の業務は、直接食料を提供したり、その他の経済支援ができたりするわけではありません。しかし、WHOなどの国際機関と協力しながら、質の高い医療を平等に提供することで、発展途上国における公衆衛生の向上に貢献し、子供たちの生活基盤を安定的に維持できるよう支援していきたいです。

世界中の子供たちが安心して日々を送り、毎日おいしいご飯を食べることが当たり前になる。これが私の理想とする世界です。